狩人物語

飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狩人物語

【Ｎコード】
Ｎ６４７８Ｙ

【作者名】
飛鳥

【あらすじ】
イケメンで最強な主人公がＨＵＮＴＥＲの世界にトリップ！ネテロの弟子で、紅い閃光と呼ばれる少女ユキノ。
原作かき回しながら、悪い奴らをフルボッコにしちゃうお話。
オリキャラ多数！只今二次試験中。

Prologue

「ユキ・・・」

悲しそうな顔をしながら、俺を見つめる兄さん。

「何でお前が・・・こんなことに・・・！」

俺の手を握り、兄さんは泣き出してしまった。
兄さん・・・

「ごめんなさい・・俺にはこれくらいしかできないけど・・・」

はっとしたようなに顔を上げる。

「ユキノ・・・！おい・・やめろ・・・！」

俺の周りに風が起こる。
だんだんと俺の体が下から消えていく。

「ユキ！ユキ！・・ユキノっ！」

顔の半分が消えた。
兄さんが必死で何か喋っているが、もう何も聞こえない。

兄さん・・・

「ありがとう・・・」

もう何も残らない。

拝啓。

「兄さん」

俺は生きてます。

元気にしてます。

だから心配しないでください。

俺は強くなりました。

ジンというハンターに拾ってもらって

色々な人に会い、色々教えてもらいました。

今日はハンター試験です。

俺は内部試験官というものをします。

兄さん。いつか会いに行きます。

次に会ったら、俺と戦ってください。

あの日のように、負けたりしません。

絶対に勝って見せます。

だから、会いに行きます。

たとえ、違う世界でも。

その日まで、待っててください。

絶対に会いに行きますから――――――――――

颯爽登場

「ここかよ」

ある定食屋を見上げながら俺は思わず呟く。
ネテロ師匠からもらった地図ではここで間違いない。
でもなぁ・・・『ハンター試験会場』。

本当にいいのか。
いつまでも悩んでられないので、俺はドアを開ける。

「いらっしぇーい」

気前のよさそうな親父の声が聞こえた。

「ご注文は？」

俺は思わずニヤける。

「ステーキ定食」

ぴくり、と反応した。
そんな露骨に反応しちゃダメだろ。

「焼き方は？」
「弱火でじっくり」

そう告げると、かわいい女の子が部屋（？）まで案内してくれた。
ウィーンと音がし、ゆっくりと動き出すエレベーター。

少し、重力感覚が狂う。

「お、食っていいのかこれ」

用意してあったのはおいしそうなステーキ達。
俺はフォークを突き刺し、大胆に噛みつく。
無我夢中でほうばっていたらチン、と音がし、止まる。

「ついちゃったか・・・・」

まだ途中だったステーキを何とか口に詰め込み、
残ったステーキを名残惜しいと思いながらエレベーターを出る。

今年はいい人材がそろってると思うんだよなぁ。

何でわかるかって？そりゃぁ勘だ。
だってはいった時の空気が俺のときと大分違うし。

そういや俺のときって、俺も含めて二人しか残らなかったんだっけ。
確か、シャル・・・シャルナークといったかな。
ま、なんにせよ

「これからが楽しみだ」

試験開始まで

「ユキノさん」
「うはいっ！？」
いきなり声をかけられ、俺は思わず情けない声を出す。
周囲の人間は振り返り何事かと俺らを見つめる。
なんだよこの羞恥プレイ。

「ユキノさん・・・大丈夫ですか？」

マーメンだった。いきなり声かけんなよ。

「ごめん。間抜けな声でた」

マーメンは苦笑いをしながら、番号札を渡してくれた。

「１０９番・・・結構遅かったな」

番号札を胸のあたりにつける。

まぁ、しょうがない。その前に師匠に頼まれた（押しつけられた）仕事を
たくさんすませてきたのだから。軽く五カ国は回った。

しかもあの狸爺・・・乗り物使ったら即爆破じゃぞ☆とか言いながら
念で爆破装置つけやがって・・・！あ、もちろん徐念した。
俺の能力で！

なんか、イラついてきた・・ーーー。
「おい兄ちゃん、俺トンパっていうんだけどよ、お近づきのしるしに乾杯しねぇか？」
「うさんくさ」
声出ちゃったけど、いいか。
でも、心なしかトンパがおろおろし始めた。
もしかして図星だったり。
なんか不自然で怪しいな。
よし、鎌をかけてみるか。
「それってホントに何も入ってねぇの？なんか変なにおいすんだけど」
もちろん嘘。むしろ今、鼻詰まってて何もにおいしないし。
「な、なんにもはいってねぇよっ、い、いいから飲んでみろよ」
あわてながら言うトンパ。ここまでくりゃあ、確実に入ってんな。
俺はトンパに追い打ちをかける。
「下剤入りジュースならいらねーよ」
言い放つ俺に、トンパは、弾丸のごとく逃げて行った。
「・・まさかほんとに入っていたとは」

俺の疑い深い性格、はじめて感謝したかもな。

「はぁ・・・眠い」

試験開始まで寝とこ。

俺は近くの壁に寄りかかると、すぐさま眠りに就いた。

誤解とけましたか？

ジリリリリリリリリリリリ！！！

「ーーーーーーーーーー！？」

俺はいきなりなったベルに、驚き声にならない叫びをあげる。

びっくりした・・・

「これより試験を開始します」

あ、サトツさん。相変わらずお髭がダンディ。

試験開始かぁ。なんか緊張してきたな。

前はそうでもなかったけどな。

年ってとるもんじゃねぇな↑

サトツさんがしゃべり終わり、集団が移動する。

やっと、試験開始か。

「おりおんざのーみぎかたにぃかがやくー」

俺はのんきに歌を口ずさみながら、走っていた。

一見ゆったり走っているように見えるが、

一歩が大きい俺の走り方は、よく兄さんに「訳わかんなくなってくるな」と

言われた。

「ねぇ、お兄さん！」

後ろから声がする。ゆるーと振り返ってみると、
満面に笑みを浮かべた少年がいた。

「俺のこと？」
一応、女なんだけど。

「うん！俺ゴン＝フリークス！お兄さん名前は？」

へぇ、ゴン君か。いいね、純情な子、好きだなぁ。

「俺は、ユキノだよ。気安くユキって呼んでくれ」
「うん！よろしくユキ！」
お互いに手を出し、握手をする。
・・・。
「ゴン。もしかして、」
「ん、なんか言った？」

やっぱり違うよなぁ。

「いや、なんでもねぇよ」

怪訝そうに首をかしげたゴンだったが、何か思い出したように
俺の手を引っ張り、後ろに駆けだした。

「え、ちょ、ちょお？！」

足がもつれて、誰かの胸にダイブしてしまった。

その誰かさんは、「うお」と言いながらも、受け止めてくれた。

「すいません・・・」

俺がその人から離れながら言う。

「大丈夫？ユキ」
「うん、大丈夫・・・」

ゴンは俺がぶつかった男――正しくは、青年とおじさんに向かって
俺のことを紹介する。

「クラピカ！レオリオ！こっちはユキだよ！」

俺がちら、と二人を見ると、すごい勢いでそらされた。
なんでさ！

「おいゴン！そいつはトンパが危険だって言ってたじゃねぇか！」

一瞬、耳を疑う。

「トンパ・・・？危険人物・・・？」
「あぁ、言っていたぞ、ヒソカと同じような快楽殺人鬼だと！」

快楽殺人鬼だと・・・？俺が？

「俺は快楽殺人鬼じゃねぇし！まず人殺しなんて普通怖くてできね
ーだろ！」

「「え・・？」」

「だって、夜とか出てきそうじゃんか！取りつかれそうじゃんか！」

何が、とはあえて言わない。嫌いなんだよ、そういう奴！

「お前、それほんとか？」

レオリオが尋ねる。

「あぁ、人を殺した事なんて一度も・・・」

ない。言いかけたところで言葉を飲む。

殺しただろ・・・自分を。

「ええい！とにかく、俺は殺さねーの！あいつと一緒にすんな」

ヒソカは嫌いだ。変態だから。

「そうだったのか・・・すまなかったな」

「いやいや、分かってもらえればそれでいいんだ」

友達が三人増えました。

走る～走る～俺たち～（古）

誤解が解けてから、俺らはすっかり打ち解けた。
いや、ほんとによかった。てか、トンパ・・・
今度脅し・・げふんげふん。挨拶しに行かなくちゃねっ！

「おいコラガキ！それは反則じゃねぇのか！」

レオリオが叫んだ。
これは有名なあのシーンじゃないか！
これは参加するに限るねっ

「なんで？」

キルアがきいた。
レオリオのこめかみあたりにうっすらと青筋が浮かぶ。
やっべぇ、超うけるんですけど！

「これは持久力を試すテストなんだぞ！」
「でも、道具使っちゃいけないとは言ってないよ」

ゴンがいった。

「一本取ったねゴン君」

俺がにやにやしながら言うと、ゴンもにへっと笑ってくれた。
やばい、超可愛い。

「ねぇ、君名前なんて言うの？」

俺が思い切って尋ねてみた。

「俺はキルア。あんたは？」

答えてくれるとは・・・地味に感動だ。

「俺はユキノ。ユキでいいぜ、よろしくキルア」

そういうと、キルアはゴンに話しかける。

「お前いくつ？」
「俺は今年で十二！」
「(同い年、ねぇ)」

お、このやり取りは。

「やっぱ俺も走ろっと」

キルア、カッコよかったな。

「おっさんの名前は？」
「おっさ・・これでもテメぇらと同じ十代だぞ俺は！」
「「「「うそおおぉお?!」」」」

俺も入りました。
やっぱりレオリオは老け顔でした。
だって、絶対兄さんより年上だよ！
俺は今年で１６。兄さんとは、６歳違い。

よってレオリオは22より年上となるのだ（何キャラ）！
いつまでもいじられているレオリオの肩に手を置く。
「レオリオ」
俺が同情の眼差しを向けると、レオリオは
「ユキ、分かってくれるのか？！」
そんなレオリオとは裏腹の言葉を俺は口にする。
「年齢偽証は立派な詐欺だよ？」
それから30分間、レオリオは口をきいてくれませんでした。

走るぜ走るぜ！

もう何時間走ったんだろ。

ぶっちゃけペース遅くて疲れてきた・・・。

楽な試験だけど精神的にはつらいよな。

「はぁ・・・・」

「なぁユキ大丈夫？」

「なんか疲れてるみたいなんだけど」

「気疲れとペースが遅くて逆に疲れた」

「あーそれわかる！」

「じゃぁさ一番前まで行こうぜ」

そういってゴンとキルアはスピードを上げた。

もちろん俺も置いて行かれたくないのでペースを上げましたよ。

一人ぼっちは嫌いだ。

そしていつの間にか一番前にまで来ていた。

「階段とかめんどくさ」

「だな。しっかしハンター試験って結構簡単かもな」

まぁ今のところただ走ってるってだけだしな。

これだけで受かるなら楽なんだけど。

この後色々面倒くさいんだよなー

本当やんなっちゃう。

「ねぇところでキルアはなんでハンターになりたいの？」

「は？俺？・・・・別にハンターになりたくなんかないよ。ものすごく難関だって言われてるから面白そうだと思っただけさ。でも拍子抜けした。ぜーんぜんつまんねーし」

本当今思うとすごい子どもたちだよね。

ヒソカが気に入っちゃうのもわかる気がしてきた。

あっ俺とあの変態を一緒にすんなよ！

ヒソカは嫌いだ、変態だから。（二回目）

「ゴンは？」

「俺はね、親父がハンターやってるから。親父みたいなハンターになるのが目標だよ」

「キルアとは違ってまともな理由だね」

「ユキ・・・それじゃまるで俺がまともじゃないみたいじゃねーか」

「まともな人は暇つぶしだなんていいません」

「あははは！」

ハンター試験を暇つぶしとか・・・

本当天才はちげーな

つーか爆笑のゴンかわい・・・・↑

「で？ユキは？」

「へ？俺？」

「そーだよ。ユキだけ言わねーとかずりーよ」

ちょっとふてくされるキルア

おいおいお姉さん暴走しそうだぜ

かわいすぎだろこの子ども組

キャラ崩壊して胸キュンキュンしそうだ

「俺はライセンスあったほうが色々と生活に便利だから・・・かな？」

「かな？って・・・自分のことだろう？なんで疑問形なんだよ」

「いやぶっちゃけ俺もあんまりちゃんとした理由ないかも」

「じゃぁ人のこと言えないじゃねーか！」

「いやキルアよりはまともだとおもうよ」

「んだとー！！」

本当試験中なのにすごく和むこの空間。

メインキャラに絡む気なかったんだけどな。

なんかほうっておけないし、何よりこの絡みが心地よい。

久々に孤独感を味合わずにいられるな。

そしてなんやかんややってているうちに出口から光が差し込んだ

嘘

「うおう、眩しい」

暗かった地下から一変して、湿原へ。
外に出ると、太陽がさんさんと照らしていた。

「やっと地下から出られたぜ」

皆お疲れのようだ。
そりゃぁ、無理もねえな。原作知ってた俺でも結構つらかったんだから。
さっきから、ヒソカのねっとりとした視線がつらい。
前に、仕事で知りあって目付けられたんだよなぁ。

「嘘だ！そいつは嘘をついている！」

突如響いた声。
それは怪我だらけの男からだった。

なんか長ったらしく理屈こねてるけど、
矛盾しまくりだ。

それよかてめぇ、俺のサトツさんにけち付けやがったな。
でも、偽物の言葉を信じてる奴もいた。

あ、レオリオ。

なんか笑えてきた。
俺は一生懸命こらえるが、とうとう吹き出してしまった。
「だはははははっ！な、なに言ってやがんだよ！ひゃははははは！超受けるんですけど！矛盾しまくりだっつーの！！」
だはははと爆笑する俺を、冷たく見つめるキルア。
偽試験官は、顔を赤くして、且あわてていう。
「ど、どこが矛盾しているというんだ！」
ようやく笑いがおさまってきた俺は、手を口に当て、説明を始める。
「よく考えてみろよ、人面猿ってのは、貧弱なんだろ？それなのにサトツさんは息も切れてないし汗もかいてない。猿には不可能ってわけだ」
周りから、そういやそうかも、といった声が聞こえてきた。
偽試験官の顔はだんだん青くなってくる。
「それに、」
俺はにこっと笑い、止めをさす。
「何で生きてる猿を連れてるのかなぁ？」
言い終わるのと同時に猿と偽試験官にトランプが刺さった。

「ありゃりゃ・・・」

ヒソカのトランプの餌食になった一人と一匹を一瞥し、

俺は動き出した集団について行った。

湿原突入

湿原に入り、俺はゴン達と別れ、一人で行動していた。

『だぁああっ！お前達うぜぇ！』

マチボッケとかジライタケとかサイミンチョウに行く手を阻まれること数十分。そろそろ我慢の限界らしい俺は手を高く振り上げた。

「ってぇーーー！！！」

『おっさんの叫び声？…チッ、アイツか』

おっさんの叫び声が遠くで聞こえ振り上げた手を下ろし直ぐ様元来た道を走り出す。

『（何であいつは大人しくしてらんないんだ。面倒事増やすな死ね）』

色々な苛立ちが混ざって今にも爆発しそうな気持ちを必死に押さえ込み血の臭いが濃いところへ向かう。まぁ、原作知ってるが、仕事だから、一応行こう。

「うん！君も合格。いいハンターになりなよ。一人で戻れるかい？」

コクリと頷いたゴンから離れたヒソカは何故か気を失ってるおっさんを肩に担いで姿を消した。俺は膝から崩れ落ちたゴンを遠くから一瞥しヒソカの後を追った。

「…キミはいつまで尾けて来る気だい？」

『やっぱりバレてた？』

こちらを見ずに言われおっさんを肩に担ぎながら走るヒソカの横まで走る。ちらりとヒソカを盗み見ると機嫌がいいのかにこにこしている。

『俺の仕事増やすようなことするなよ』

「だってあまりにタルいんだもん。選考作業を手伝ってやろうと思ってね」

『受験者の中でお前と同等または上の奴なんて俺とあいつだけだろ』

こいつの合否基準が全く理解出来ない。ゴンが合格なのはわかるが気絶してるおっさんを何故合格にしたのか少しだけ気になる。

『…っと、やっと着いた。んじゃ彼は預かってくよ』

二次試験会場らしき場所に着き俺達は足を止めた。ヒソカからおっさんを受け取り近くの太い木まで引き摺る。

「相変わらずだなぁ、ユキは。くくっ、そこが可愛いんだけどね」

舌なめずりをしてそんなことを言っていたなんてもちろん俺は知らない。

二次試験までの休息

俺はレオリオが入る木の下で二次試験が始まるまで待っていた。

「ふぅ・・・」

暇すぎる。することない。
さっきまでレオリオで遊んでいたのだが、いい加減あきて
ケータイをいじっていた。

ジンからの着信服歴が275件。
仕事の依頼が7件入っていた。

つーか、ジンどんだけかけたんだ。

俺が悩んでいると、手に持っていたケータイが震える。
誰かと思い見てみれば、案の定ジンだった。

「もしもし」
『っユキか？何度かけたんだぞ』
「試験中だったんだよ、てかかけすぎだっつーの」
『しょうがないだろ、心配だったんだから』
「ふーん。じゃっ！」
『あってめっ、切るな』

ジンが何か言っていたが、無視して切った。

どうせ危ない奴は即ぼこれとかしかいわねーもん。

するといいタイミングでゴン達が駆けてきた。

「ユキっよかった、ちゃんと合格してたんだね！」

ゴン、君はさっきまで変態と直面してたって言うのに・・・

俺の心配までしてくれるなんて、なんていい子なんだ！

「あぁ、大丈夫だよ。というかレオリオはどうしてこんなことに・・・？」

知ってるけど（笑）

「そうなんだよ、俺も覚えてねぇんだよな」

「うぉう！？」

絶対に寝ていると思っていた俺は、下から聞こえた声に

素っ頓狂な声を上げる。

「ユキ・・・・・・」

「クラピカ、そんな目で見ないで」

憐みの目で見てくる、クラピカ。

そんな目で見られたって、いたたまれないから。

「というより、何で中に入っていないのだ？」

「あぁ、それは」

入れないんだよ、そう言おうとした俺をさえぎり、

銀髪美少年もといキルアが言う。

「入れねぇんだよ」
「キルア！」

ゴンはキルアを見つけ、うれしそうだ。
二人で話し始めた二人を見ていたら、レオリオに話しかけられた。

「なんだ、羨ましいのか？」

にやにやしながら言ったレオリオ。

「いんや、若いっていいなと思って」
「ユキ。お前は幾つだ？」
「十六だけど」

言った瞬間、四人が固まる。あ、タイムストップとかは使ってない。

「え・・何さ？」
「いや、１３ぐらいだと思ってたから」
「ははは、俺３つも若返ってたか」

身長大分伸びたと思ったんだけどな・・
地味に悲しい。

そんなこんなしているうちに、１２時になり、
ドアが開いた。

さぁ、二次試験スタートだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6478y/

狩人物語

2011年11月20日20時26分発行